

懐かしくも美しい
日本の俳句

Heartful Haiku Poems

Vol.63

不二^{ふじ}ひとつうづみ^{のこ}残^{のこ}して若葉^{わかば}かな 蕪村^{ぶそん}



イラスト ひらいみも

火山である「富士」は「不二」や「不尽」とも書き、古くから神仏をまつる信仰の山であった。月に帰るかぐや姫から贈られた不死の薬と手紙を、天子が兵に命じて、駿河（静岡県）にある天にもっとも近い山で燃やした（『竹取物語』）。その煙はいつまでも消えることがなかったので不死（富士）の山という、そんな話を記憶している人もいるだろう。

ところで詩歌の世界では、〈好きな女性に逢う方法がないので、自分の胸は富士山のように燃え続けるのか〉という意味で、「我妹子に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ」（万葉巻十一）と詠むように、恋する心を「富士の煙によそへて」（『古今集』仮名序）と表現した。その一方で、

「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」（『伊勢物語』九段）という著名な歌などを介して、富士の叙景的な美を発見してゆくことになる。

掲出句はその叙景的な伝統美の継承で、句意は〈さすがに富士山だけは埋め残しているが、麓はすっかり若葉に覆いつくされている〉となる。まだ白雪が残る季節であることを思い合わせると、まことに美しく、わかりやすい構図である。『蕪村句集講義』で正岡子規は「月並臭い」と評し、高浜虚子は「大きい景色」と称えて評価が分かれたが、名句とはそうしたものであろう。作品は『蕪村句集』による。

東洋大学教授 谷地快一

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Yusuke Yamamoto

1982年山梨県生まれ。甲州印傳の製法を代々継承する家に生まれ育ち、大学卒業後に父の山本誠氏に弟子入り。現在は弟の法行さんとともに、技に磨きをかける日々を送る。



甲州印傳(こうしゅういんでん)

甲州地方でつくられてきた革工芸品。明治には山梨県の郷土品としての地位を築き、1987年に国の伝統工芸品の指定を受けた。印傳の名の由来は、印度から伝来したとされるが定かではない。



日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE

パソコンやタブレット、CS放送など多彩にお楽しみください。

TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)

冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00



特別番組

「明日への扉スペシャル2013」

4月14日(日)/21日(日) 10:00~10:30

特別編集した内容を30分番組にて放送。

NEW!!

最新号のご案内 好評公開中

No.043/別府竹細工職人 清水 貴之 氏

甲州印傳職人

山本裕輔氏

門外不出の秘伝を継ぎ
日々、漆に挑む。

甲州が生んだ戦国武将、武田信玄。数多くの戦で名高い信玄だが、ある工芸品の発展に貢献したことはあまり知られていない。それは鹿革に漆の紋様を施した「甲州印傳」。丸みを帯びた漆がもたらす光沢と、えも言われぬ肌触りを持つ山梨県の伝統工芸品だ。信玄は印傳の袋に甲冑(かっちゅう)を入れて運んだと伝えられている、それが信玄の名を取った「信玄袋」である。江戸のころには、小物を入れる巾着や合切袋(がっさい)がつくられるようになり、今も男性の着物を引き立てている。

山本裕輔さんは、400年を超える甲州印傳の伝統を守る若き職人。師匠である父の姿を通して、幼いころからこの世界になじんできた。

いつ家を継ごうと思った?

山本「意識し始めたのは私が中学生のときです。父が甲州印傳において日

本で唯一の伝統工芸士に認定され、この「伝統工芸士」という漢字5文字が心に響いたんです」

大学を卒業して弟子入り。しかし、なじみがあるつもりだった仕事もやってみると、学ばべきことがとてつもなく多かった。初めのころは、鹿革の裏表もなかなか見分けがつかなかったが、ひたすら修業を積み、今では印傳の出来を左右する大切な工程を担う。一番の腕の見せどころは漆付け。へらを通して伝わる感覚だけを頼りに、一回で漆を型紙通りに付ける。漆の硬さは紋様や気候に応じて変えなければならず、その練り加減は門外不出という。漆柄を付けた革は室に入れ乾燥させる。漆は湿気がないと固まらないため、湿度と温度の調節が重要になる。まさに漆という「生き物」を相手に、経験に裏打ちされた技と勘を駆使し、美しい印傳に仕上げる。

これからの目標は?

山本「甲州印傳の名前は知っていても、どんなものか知らない人が多いと思うんです。持たなくてもいいから、まずは印傳について知ってほしい。そのためにも、より良い物をつくっていきたいですね」

作業場では2歳違いの弟、法行(のりゆき)さんが縫製の作業にいそむ。力を合わせて仕事に取り組みながらも、自分と違う感性を持つ法行さんは良きライバルという。父に憧れ、この世界に足を踏み入れた若き職人。兄弟で切磋琢磨し、さらなる高みを目指す。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2011年4月取材、掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!

伝統の甲州印傳づくりに取り組む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。